

たけじ 坂上 多計二 さん

1925(大正14)年6月26日生まれ

陸軍 歩兵

第100師団独立歩兵第165大隊

海軍 第103軍需部ダバオ支部

フィリピン・ミンダナオ島



私は比島ミンダナオ島ダバオ市の郊外ラパンダイの海軍直営農場で、軍属として8名の指導者と共に台湾人と在留日本人併せて120名で、生鮮食料を生産して現地陸海軍へ補給する仕事をしていました。

1944年4月に徴兵検査に合格し、陸軍独立歩兵第165大隊高橋中隊へ現地入隊しましたが、一週間後に海軍司令部の命により、元の農場へ現役兵のまま派遣されて、営農指導を続けていました。

翌年5月に米軍がダバオ周辺に上陸し、連日砲爆撃を続け死傷者が続出し営農が出来なくなり、私は隊員30名を指揮してジャングル地帯へ逃げ込み、山地住民の開墾跡地を見つけて小屋を設営し、自活生活に入りました。

持ち込んだ食糧はすぐ乏しくなり、煮れば食べられる野草のほか、サツマイモのつる、トカゲなど爬虫類、鳥、猿など何でも食料にしました。毎日エサ探しにジャングルを徘徊すればプーンと死臭が漂い、大木に寄りかかり遠目に微笑んでいる日本兵がいて近付いてみると、もう死亡していて、蠅が目元口元に蠅が産卵し、人はもう死亡していて蠅が目元と口元にウジを産み付けうごめいているのが、薄目を開け白い歯を見せているように見えるのだった。

ある夕方、弱った日本兵が「泊めてくれ」と訪れたが、こちらも極限状態で拒絶し追い出したが、悲しい顔で立ち去り、翌日エサ探しに出たら直ぐ近くで死亡しており、家族写真が地面に置いてあった。裏に「妹尾」と名前が書かれ、望郷の念を抱いて亡くなったのかと胸が痛んだが、わが隊員も栄養失調で日ごとに痩せ細り、人間は塩分が尽きると身体全体がパンパンに水膨れする。こうなると間もなくジャングルの露となるのです。

一緒にジャングルに逃げた台湾人隊員も10名足らずとなり、何でも食べ物を分け隔てず接し、消し炭で下痢を止めてくれたり、あの優しさは忘れられない。

米軍のビラを拾い、鈴木貫太郎総理がポツダム宣言を受諾したと敗戦を知ったが、本気にはなれなかった。9月30日、弱った隊員を励まし支えながら米軍の分哨へ投降した時は隊員は僅かだった。

今政府が周辺国の脅威を強調して、平和憲法を改憲して「緊急事態の条項」を取り込もうと構えているのが見え見えです。「緊急事態の条項」とは総理大臣にフリーハンドを与える危険性を敏感に感じるのは、先の大戦を経験した我々戦場体験者のカンの然らしむものであり、私は老骨に鞭打ち生きている限り平和憲法擁護の声を大にしたいと思います。

ご清聴、有り難う御座います。

(2016年9月4日 あの戦場体験を語り継ぐ集いより)